北都夜明けの金字塔 舟をこぎいで流れ来ぬ カムイの声に導かれ 春あけぼのの夢に見て

はるかなる大雪の山 のぞみみん 広がりし草原に ひとりたち

楡の木立をさまよえば 夏宵闇の緑風に 森が葉音を雨ときき

はるかなる天空の星 広がりし高原に ひとりたち はゆる山小屋ひとつ

身に浴びん

はるかなるシベリアの風 冬音せまりき危機焦燥 入日の茜に涙するいりひょかねなんだ 恵みの季節は過ぎゆきて 気も霧散す 秋夕暮れの鹿の声にあきゆうぐ 広がりし牧野に ひとりたち

胸に秘めたる青写真 凍てつく寒さに身を起こし 冬つとめてのゆめうつつ かそかに遠く銀狼の咆哮

旅に追ふ はるかなる白雲の頂 広がりし雪原に ひとりたち

> はるかなる先代の魂 広がりし蝦夷に 新風破天の新時代しんぷうはてんしんじだい 寒風蒼碧を貫かん 今祭日の猛き火よ 大地を揺るがして嵐おこる 寮友は和し

解き放つ

一希君